

勉強するために

きているんじゃないやありません

高 田 峯 尾

数年前フルブライト教授として入浴し、女子大で一年ほど教鞭をとった友人のSは、米国で名のある女子大学の教授としての立場から、日本の女子大についていろいろの感想や批評を口にしたが、彼女にはなぜこの女子大生が大学生らしく振舞わないかわからないと首をかしげるのだった。当然下調べをしてあるはずの個所をきかれると「やってありません」と平然と勇ましく言つてのける。周囲の者たちもそれを別に奇異な振舞とは思わならしい。また、卒業試験にすべると、今までは個人的に口をきいたこともない教授のところを押しかけて哀訴する。とりわけSをびっくりさせたのは、卒論を途中で放棄した場合「家庭の事情」のために書けませんでしたと、ほんの一言ほどのタイプ書きの一札を入れてすんでしまうということだった。幼ないと言おうか、だらしな言おうか、それでも一人前の大学生と言えるの？ となじられて私も弱つたのである。とにかくアメリカでも英国でも通用しないおかしなこころしい。ま

して卒業にあたって、定められた水準に達し得なかった学生たちに「女だから」とか「お嫁にゆく人に傷をつけなくても」とか言つたような有難いおやごころを示すようなことは夢想だにもしないだろう。

千里万里をふみ越えてはるばるやって来ようとも、杓子定規なほど水準をさげてくれないのが、あちらの大学のやり方である。ラテン語をやつていなかった私が、ややこしい術語を覚えられなくて「生理学」の前期をこつてしまった時に、主任教授から「もし後期に六十点とれなかつた場合は気の毒だが規定通り学校を立ち去つてほしい」と言ひ渡された。試験場に臨む前に私は立ち去るための荷づりをやつたものである。

現在、私たち教員が単位不足で卒業出来ない学生たちに対してとるところの処置には、たぶん「女だから」とか「お嫁にゆく時に工合が悪いから」とかおよそアカデミックな方面とは縁の遠いいた

わりの感じがふくまれているのではないだろうか。私の若い頃のよ
うに他愛なくもないセンチメンタルでもなく、物事を割り切つて考
えられるように育つて来たいいわゆる現代つ児の女子大生に対して、
こうした思いやりはかえつて失礼ではないだろうか。真実の意味で
の現代つ児だつたら、あつさり自分の非は認めて、そう言う甘え方
を自分に許さないのが当然である。その点、国立や共学の大学では
そういう手かげんは加えられないだろうし「女だから」という理
由で―また加える必要もあるまい。それでいながら女子学生が―特
に文学部等の場合―トップで卒業することは珍らしくない。

女子大が「花嫁学校」などと蔭口をたたかれたり、女子大無用論
が叫ばれたり、女子大なんかとそつぽをむく優秀な女子学生が少く
ないという現象は一体何によることだろう。私たち女子大の教員た
ちはもう一度よく考えてみる必要がある。十八世紀的な優越感で
女性の上に立ち、弱きものへのいたわりを口にする男性、昔ながら
の人情のこまやかさで落伍者に同情をよせる女性は私たちの中にい
ないだろうか、そこに女子大を嫁入り道具の一つと考えて無理な哀
訴をする親たちが加つて大学のアカデミックな立場を動かそうとし
たらどうということになるだろう。妻としてふさわしい美しくしとや
かな女性たちを育てて社会に送り出すのが女子大の本来の目的だと
いうならば、そうしてあくまでもその線をゆくつもりならば「花嫁
学校」と言われても「はい、そうです」と、にこにこ出来るはずだ
が、花嫁学校のふんい気をもちながら、一方で他の大学にひけをと
らない学問の殿堂だと考えたがっているのだつたら事は面倒にな

△女子教育の問題点▽

る。学問の殿堂だと主張するつもりなら、いやしくも大学である以
上、相当きびしい標準を定め、そこに到達出来ない者はふり落して
も止むを得ないというやり方にて、それを保持することが必要な
のは言うまでもあるまい。

現在多数の学生の中には、やればやれるだけの能力を持ちながら、
その能力を發揮しない者が少なくない。ねばりがたりない。すぐに
なげ出してしまふ。卒論が一つの例である。もつとも「私の組では
落さないからね」と言うような宣言を学年始めにして学生を安心さ
せてしまふような教師も数多い中にはないでもない。それを誓いの
言葉のようにうけ取つて安心してなまける学生だけを責められるだ
ろうか。

私のいたアメリカの女子大の一教授は、切りより一時間おくれ
ペーパーを提出した学生に、前の晩眠つたか、とたづねた。二時間
ばかりねましたと答えると、教授はきびしい調子で言つた。

「二時間ねむるひまがあつたのぢやないか。その時間も使つてい
ら提出に間に合つたのではないかね。」

この苛酷とも思える言葉は、しかし、その学生が社会に出た後に
よい指針となつたのである。言うまでもないが学問は一つ一つ積み
重ねてゆくべきもので泥縄でちゃんとした仕事が出たり、答案が
けたりするものではない。学生の中には急げていることを指摘され
ると「私たちは女子大に勉強をするために来てるんぢやありません」と
と公言して憚らない者さえある。それならそれで覚悟はよいのかと
思うと、土壇場になつて見苦しくあわてふためくことが多い。

だが学生たちが力一ばいやらないということには私たち教師の責任がある。学生の数はふえるばかりで、特に必修科目ともなればマイクを使わねばならない。こちらの熱の入れどころにも学生のレスポンスにも狂いがくる。それに現在のところ労働過重になっている私たちは、週に吾月に何回満足のゆく講義なり教え方なりしている

女子教育の目的は何か

私の卒業したモント・ホーリョク女子大学は一八三七年すなわち百三十年前に設立されて、アメリカにおいてはリベラル・アーツの女子大学として、もっとも古いものであります。その設立当時は、女性は家庭を守るべきものであり、中等学校以上の教育は不必要であると思われていました。そこへメリー・ライオンという力のある教育者が、たとい家庭婦人であつてもある程度の教養を身につけていなければ、その子女を育てるにふさわしくない、という見地から、多くの有力者の協力と関心を求めて、ついにこの学園を設立するに至つたのであります。そして現在七大女子大学の一つとして、一流の教育をアメリカの女性に施しているということは事実であります。

同志社女子大学の設立の趣旨は、それを日本におけるいわゆるモント・ホーリョク・カレッジにすることでありましたが、年が経つ

ことだろう。今更いろいろの苦情をのべたり注文をつけたりすることは無理にちがいないが、少くとも大学らしくあれというならば、学生のある水準まで引きあげて、学問の尊敬さをいく分なりとも守ると言うことはある程度まで不可能とは言えまいと考える。

(女子大学教授・英文学)

エスタ・ヒバド

につれていろいろな問題が起つて来て、そういうわけにいかないということが分つてまいりました。まず第一に気付くことは、文部省を始め一般社会の人の女子教育に対する目標がまだ確定していないことであります。ある人は大学教育は女性の結婚するまでの時間つぶしの期間であるかのように思われているようです。またある人はだれもかれも大学へ進学するから、自分も行かなければ取り残されたような気がすると言っています。その親にとっては、大事な娘に箔を付けてもらいたい、縁談の時プラスになるようにと願っているかもしれません。また本当に使命観をもって、社会において何らかの貢献がしたいと願ひ、就職の準備にしようと思つている女性もないとは限りません。しかし大多数の学生は、家庭をもつために必要と思われる、また人間として立派に生活が出来るだけの教養を身につけようと思つて、大学教育を要求しているのではないのでしょうか。

これら四つの目的のうちでどれが一番正しいかということは、日本の社会がどういふ女性を要求しているかによつて決まるでしょう。

聞くところによりますと、女子大学卒業生の九割までは、おそがれはやかれ結婚して家庭をもつております。もつとも結婚をひかえて、しばらく勤める人もありますけれども、一生独身で通す女性には僅か一割足らずであります。もしそうであれば、女子教育の目的は家庭の準備として考えるべきものであるということは明らかであります。

しかしそうだといつても、女子大学は単なる花嫁修業の場ではなく、むしろ人生のカギとなるべき知識と経験を与える重要な使命をもつております。人生を世界旅行にたとえてみましょう。その準備として、私たちはどういふあらゆる国を調べ、あらゆる知識をもつことは不可能であるといふことは申すまでもありません。しかし地図を手持って歩いて行けば、どんな未知の国でもどうにか迷わずに目的地に到達することができるでしょう。東西南北の見当をつけ、自分の行こうとしている所はどのへんにあるかといふことを知り、そちらに向つて行けば、途中で分らなくなつても、その地図をもつて一度調べさえすれば行くべき道がはっきり示されるでしょう。

これと同じように、大学教育はいまだ訪ねたことのない未知の世界へ行くべき道を示す地図を私たちの手に渡してくれるのであります。もしある旅行者が一つの国にのみあこがれてその地理や産物や風習を調べて旅立つたとすれば、その国に滞在している間はじゅう

女子教育の問題点

ぶん楽しむことができるかもしれませんが、いったんその国境を離れると、全く不案内になつてしまふ恐れはないでしょうか。四年間、一つの狭い範囲の専門課目を集中的に勉強しても、将来果してそれだけそれが役に立つか疑問であると思ひます。それよりむしろ浅くても、広くいろいろな分野の知識を一応身につけて、今後どんな問題にぶつかつてもそれを解決するに役立つ方法や原理を覚えるほうが、はるかに有益ではないでしょうか。ところが現在日本の大学の教育方針は専門教育のほうへと向つてゐることは明らかであります。その証拠には、専門は違つても学生のほとんどは、教職課程をとうとうとしています。しかしそのうちの何人が実際に教壇に立つか疑問であります。しかも教員免許状を得るため教育実習を二週間も受けて、他の授業を休まなければならないといふことは、時間ももつたないと思ひます。それよりはどうしても免許状を取りたい学生は、卒業後、教職課程に集中し、少くとも一カ月実習したうえで、それをとつたほうが責任ある中、高等教育ができ、したがつてその発展がのぞまれるのではなからうかと思ひます。

これとはまた別に、在学中にもう少し深く専門分野を研究しようと思つる学生のためには、“Honors Course”すなわち個人研究の課目を設けたらどうかと思ひます。そうすれば卒業後その訓練を受けた人は大学院に優先的にはいれる資格を得ることが出来ます。とにかく就職のための訓練と一般教養を与える教育とを両立させることは無理でしょう。両方を同時にしようとするればどちらも中途半端になつてしまいます。聖書に書いてあるように「だれでも二人の主人

に兼ね仕えることはできない」のであります。

以上述べたことは、夢のような理想と思われるかもしれませんが、現状のままでは中途半端な人間しか社会に送り出すことができません。これを機会に、思い切って女子大学教育の根本的な目標を再検

男女同数が理想

平岡澄江

同志社中学校が男女共学の新制中学校として発足したのは昭和十二年四月のことであつたから、この三月で満二十年の月日を経たことになる。周到な準備と細やかな注意とをもつて始められた共学は、最初女子の設備が不十分であつたとは言へ、非常に順調な歩みを続けてきている。共学教育を受け得なかつた私自身が、現在この中学校に学んでいる女生徒に対して時として羨望の感を抱くほどである。従つて目下のところ取り立てて述べねばならないほどの問題はないというのが結論であるが、以下私の経験や感想を少し書いてみたいと思つた。

神がこの世に男女を創り互にその特性を發揮しつつ相補つて生活するように定め給うたからであろうか、学校教育においても男女共学はごく自然な姿として私の目にうつる。女子と共に学ぶかゆえに男子は自ら紳士的になり、この二十年間いわゆる暴力事件と呼ばれてものを経験しなかつた。多少あつたとしてもそれは極く軽度なも

討して、日本の社会の要求にこたえて生活のあらゆる問題を解決できる知識を備えた女性を社会に送り出すよう奮起しようではありませんか。
(女子大学教授・英文学)

ので、男生徒の粗暴さを覚悟して共学教育にたづさわつた私にとつて実にうれしい驚きである。女子は男子の及ばない点や男子のなし得ない面に自然心を用いるようになっていく。例えばクラス会一つを例にとつてみても大抵の場合茶菓の用意は女子の手で、会場作りは男子の手によってなされている。私が二年生を担任した或年のクラス会では、女生徒の自発的な計画により、彼ら自らの手で大変においしいサンドイッチとドーナツが作られたことがあつた。会場準備と出来上つた料理を割烹室から会場まで運ぶのが男生徒の役目で、紅茶の準備は先生である私の責任であつたが本当に楽しかつた。共学ならではの全くほほえましい光景であつた。

女生徒だけが学ぶ特権を有する学科は家庭科であるが、女生徒の多くはこれに大変熱心で毎年の学園祭を飾る展覧会には彼らのすばらしい力作が一段と光をそえるのが常である。中学初期の年令においては一般に女子の方が男子より発育が進んでいるので、一年生の

女子は男子に対して「お姉様」という感がするが、上級に進むに従って男子の生長発達がめざましくなり、この感次第に消えて、いつの間にか男女が対等な立場で互に他の特性を認識し合うようになって行くのである。中学時代の大切な基礎教育をこのような雰囲気の中で受け得られるのは彼らにとって誠に仕合せであると思う。

本校の女子教育について強いて問題点をあげれば、次の二つではなからうか。

(一) 男女の数について。

現在男女の数の比は約二対一である。女子の数が男子の半数であるというこの事実が、共学教育の正常な在り方に何らかの歪を生じさせてはいないかが気になる。数が少いがゆえに自然女子が大切にされ過ぎる嫌いがある。甘やかされることは女子にとって決して好結果を生み出さない。男女の数の接近が共学教育にとって望ましいと考えるのであるが、過去数年間の入学試験において男女の受験生を対等に取扱う時、合格者の男女数の比が何故か不思議にも約二対一となるのである。もし女子の数を多くしようと思えば女子の合格点のレベルを思い切つて下げればよいわけであるが、そうすることによって力の弱い女子が混じると共学が今ほどうまく行かない原因となる恐れがある。昭和二十二年の新しい学制発足の時に、もし旧制の同志社女学校と中学校とが合併して男女ほぼ同数の共学中高を誕生させたといえれば、現在どのような結果になっているだろうか、と私は時々思ってみるのである。こんなことを言ったら誰かにお叱りを蒙るかもしれないが、あの時そうすべきではなかったかと

△ 女子教育の問題点 △

さえ私は思うのである。

(二) 寮の必要性

現在の中学校には女子寮はおろか男子のためにも全く寮というものがないのは確かに問題である。これでは遠隔地からの志願者を受け入れることができない。この年代の子供らに特に女子の場合に下宿生活をさせてまで同志社中学校入学を考える親は恐らくないであろう。理想的な男子寮と女子寮とを設備して地方からの入学者を受け入れる態勢が是非必要である。また良き寮生活が日々の教育に及ぼす影響は必ず大であると確信する。

最後に、女子教育に限られたことではないが日頃私の感じている教育上の問題点に触れることを許していただきたい。三月に挙行された卒業式において、在校総代の送別の辞にも卒業生総代の答辞の中にも述べられたのは毎朝の礼拝が厳肅にまもれないことに対する遺憾の念であった。送る者も送られる者も「厳肅な礼拝」という一事をこれほどまで深く心にかけているのは、彼らが同志社教育の特殊性であるところのキリスト教を根幹とした教育を非常に大切なものとして認識しているからである。その大切なものがそれにふさわしい重さをもって取扱われていない点を残念に思つたのであろう。一つの式典において二人の代表者から期せずして同じ意味の言葉を耳にした時、私は彼らに対して申し訳ない思いに満たされたのであった。厳肅は礼拝がまもれないのは決して生徒会長や生徒会の委員の責任ではない。それほど大切なものを真に大切なものとしてのぞむ心が私たち教師に乏しいからである。礼拝の持ち方に創意工夫を加

え、これを意義あらしめようとする教師側の熱意が足りないからである。生徒と共に礼拝をまもり、そこで語られる奨励や忠告を教育的に捉えて生徒指導上に活かそうとする努力が欠けているのではないだろうか。いやしくも本校の教師としての重大な使命を受けたから

学生相互の融和と 徹底した指導

同志社女子教育の一環である女子大学は、女子専門学校を母体として発足し、今年は十五回目の卒業生を社会に送り出したのである。先日、家政科卒業生の一人が大学を去るに当って「私共は英文科や音楽科の方々とともに親しいつながりをもって学校を去って行きかけたのです」と私に言われた。いま私は、創立当時の理想であったリベラル・アーツは英文、音楽、家政の三方面が美しく融合された女性を世に送り出すことではなかったかと反省させられている。英文や家政の学生は副専攻として音楽を、また家政の学生が英文学を学んでいた時のことを思い出す。その頃の卒業生はすでに卒業後十年を記念してそれぞれ会合をもたれた。その人々はいつも三専攻の卒業生が仲よく計画し一堂に会して十年の歩みを親しく語り合っておられた。私どもはそのような雰囲気を楽しんでいるが、現在にはむしろ山積された各学部での各教科に追いつかされている現状に無責任にも押し流されて来てしまったのである。しかし私は発足当時のす

には、全力をあげて創立の精神にそう教育をするよう努めたいものであると思う。これは本校の一教師としての私の反省であり願ひである。

(中学校教諭・英語)

久次米哲子

べてがよいというのではない。ただわが国に特色あるリベラル・アーツ・カレッジとして生れた大学にしながらこの方面の自覚が不足であったことを考えさせられている。もちろん教科の内容が充実して来たこと、学生数が増加したことがその主な原因であると思うが、立学の特徴を忘れてはならない。四年間も同じ大学に学んだ学生たちの心の底に流れる真のキリスト教精神を皆がもつとしっかり持つて卒業して貰わねばならない。

私はいま家政科の立場から考えることにする。家政科とは単に裁縫と料理だけを学ぶところではない。ここでは同志社精神を基礎とした立派な家庭を作り、その地域社会においての真の指導者となりうる人物の続出を願っている。在学四年間にこの目標にむかって、一、二年次は主に自分自身の教養を身につけて人間として真に生きることを学び、三、四年次には主に専門の知識の修得になつていく。将来活動するに当つてその人格が円満であると同時に正確な知識が

必要のために一応科学の基礎として生物、化学、物理学を学び、その後これらと関連ある学科すなわち生物化学、繊維化学、食品化学、調理科学、栄養生理学や栄養学等に加えて児童教育学、児童保健学、被服構成学、服飾意匠学、室内装飾論、生計費論等を学んでいる。ところが学生はこうした学科の関連性を考えることなしに各学科の最後の試験がすむともう終止符を打ってしまふ。もちろんこれは知識を学生の生活に、また思考の中に十分織りこみ得なかつた教員側の責任もあることと反省させられる。一方学生は多くの知識をもつと実験実習にとり入れて生活と結びつけてほしいと願っている。現在では科学の基礎実験の他に食品化学、食品微生物学、有機生物化学、界面化学、繊維化学、栄養生理学、調理科学、栄養学等の実験があり、被服、調理、家庭管理等の実習や被服、栄養指導、家事経済等の演習がおかれている。以上のように沢山の科目はあるが、栄養士や教員免許の資格をうるために、かなり沢山の学科が厚生省や文部省から要求されているためにその全部を修得する事はほとんど不可能である。なお学生の負担が重すぎるために今まで必修としていた「生活実習」を食物学科においては選択科目にしなければならなくなつた。この学科は特に学校側の理解と援助によつて過去六年余り続いて来たものである。主に家庭管理の実習ハウスでクリスチャンホームの様式により、学生は十日ないし二週間、十人から十三人くらいが一つの家に住み、主婦としての運営を皆が交代で経験するのである。毎日の授業の間を見出して掃除、洗濯や食物の買出しから調理、そして先生や先輩らのお客様の御招待までを限られた時間と

△女子教育の問題点▽

経費で処理して行くのである。こうした経験はただ何も考えないで両親の許から、また寮から通つていた学生には大きい貴重な体験となる。そして僅かの期間でも一緒に生活し得たお互いには細やかな暖かい友情が生れるのである。私は先年アメリカのコーネル大学の実習ハウスに招待されたが、ここでは五人くらい、すなわち普通の家庭の人数単位の学生が一学期間そこで生活し、その間に生後一年以内の乳児を孤児院から借りて、育児の実習も兼ねておられた。

私はここを見学して日本では学生が学習を続けながら一つの生命を預かることは到底設備等の点からも出来ないが、せめて学生の人数を今の半分とし、期間を三倍くらいにのほすことが出来れば一層落ち着いて管理実習の成果が上がるように思われるが、現在の学生数ではなかなかその実現は不可能であらう。次に四年次Aコースすなわち家政学科の学生にのみしばらく課せられていた家政演習はいわゆる論文と考えられるもので、学生が各教授の指導のもとに自由の一つの問題ととりくみそれをまとめ、毎年三月一、二日がその発表日であつた。一時形を変えていたBコースすなわち食物学科にも本年から同じようにこの機会が開かれたことは望ましいと思う。

家政学は実際の学科である以上私どもは学生に実行の出来る力をもつて卒業してほしいと願っている。そのために教師としてはたえず求めて行く力の原動力を研究や読書で養い、熱心な指導力がなければならぬ。学生数の少かつた発足当時を考えると誠に結構であつた。しかし私学の経営を考え、大学として十九年の歩みを続けて来た今私どもは単に学生数の多いことをかこつてはいられない。む

しる大学としての発展のしるしを喜ぶと同時にいかにして徹底した指導が出来るかを考えねばならない。同じ学部と同じ学生たちが互に知り合い手を取り合って行かねば、私共の学んでいることは絶対に役立たないと思う。その意味で、つい先日、同志社女子大学家政学会の設立が実現されたのである。従来は家政演習を通して同じ方面の研究をまとめた卒業生は各教室ごとに年に一回くらい会をもっていたが、今回は家政学部の卒業生全体が一つになって、在学生と

教育以前の問題

第二次世界大戦の後、教育制度の変革にもなつて、全国の大学をはじめ高校・中学の学生生徒の数は急速に増加し、その結果、従来比較的小ぢまりしていた同志社学園も次第に膨張すると共に、経営上あらゆる方面において変化を生じた。その中の一つの問題は、いわゆる独立採算制であろう。終戦以前の同志社の経営は総合財政の上になり立っており、従つて、たとえば大学の収入が黒字でそのあまった金が他の部門の赤字を埋めても、また、女学校の黒字が中学校の赤字を補うという結果になつても、それは総合財政の観点から、当然のこととしてあやしまれなかつた。このような総合財政による経営方針をとっている学園は、現在でも決して珍らしくはないが、同志社のように一旦総合財政による経営を廢して独算制をとり、しかもそれで十数年を経過したとなれば、全てが固定化して、今更、以前のような総合財政制にもどることは、おそらく不可能なこと

手を取りあえる機会をもつたのである。学内で研究されたことを卒業生が社会に活かし、社会での色々の知識を在学生に与えて貰うことが出来れば誠に結構である。四年間女子大学で育てられた多くの芽は今静かに春の陽を浴びて、その教養と知性が力強く社会に伸びようとしていることを信じてやまないのである。

(女子大学教授・栄養学)

中村 貢

あろう。もちろん同志社が、独算制に踏み切らねばならなかつた原因に止むを得ぬ事情のあつたことは充分に察せられる。そして、独算制を強いられたそれぞれの学校が、何とかバランスのとれた経営状態となり、戦後の経済的危機を脱することができたことは、一応の成功であつたと言えよう。しかし、ここに至るまでの苦心は、単に経営者や学長・校長たちだけの問題ではなく、教育活動に専念すべき教師たちも、経営の問題に一喜一憂しなければならぬといつた状態を生じ、ひいてはこれがさまざまの望まぬ問題の原因ともなつたし、なお将来においても、更により困難な問題を惹起するおそれなしといふことはできない。同志社が独算制に踏み切つたことは、経営上止むを得なかつたとは思つが、同志社全体の教育の面からすれば、プラスよりもむしろマイナスの面が多いのではないかとさえ考えられる。

この独算制に起因するマイナス面に、綜合学園としての同志社教育に対する関心の欠如とでも言うべきものがある。自分たちの属する学校のことや自分たちの生活に関しては相当の関心をもっているが、他の学校のこととはもちろん、同志社全体のことに關しては、自分たちに直接の影響が及ばない限り「われ関せず」といった気持ちがないであらうか。現在の制度が続く限り、こうした傾向のあるのは無理もないことかも知れない。しかし、将来更に躍進し、校祖の理想を実現せんがためには、同志社は単に総長や理事長はじめ、極く少数の人たちに経営方針や教育理念等をゆだねておくべきではなからう。今こそ教職員がこぞって全体的な意識に目覚め、その名の示すように一つの目的に向つて一大ヴィジョンを抱いて進む決意がなかつたならば、母校の前途甚だ憂うべしと言わざるを得ない。この見地よりして、従来行なわれている独算制も、現在の状態の上に安住するのではなく、何らかの手段を講じてその欠点を除去すべき時期に到達しているのではないかと思う。

少し前置きが長くなったが、同志社女子教育の問題点も、同志社教育という全体的な視野に立つてでなければ解決することの不可能なものが多いのではなからうか。もちろん、同志社の女子教育と言つても必ずしも栄光館をめぐる女子大学や女子中・高だけの問題ではなからう。現に、同志社大学には、同志社女子大学の学生数を凌駕する約二、五〇〇名（昭和四一年度）の女子学生がおり、その他、香里中・高校を除くすべての学校は其学であり、そこには必ず多かれ少なかれ女子教育の問題がある筈である。

△女子教育の問題点▽

女子部の一貫教育といったことが、しばしば問題にされる。キャンパスを同じくし、栄光館を共有し、校舎は互いに隣接している状態で、どうしてもっと緊密な連携がとれないのか、どうしてもっと有無相通じることができないのか、昔はもっとよくいったではないか、と言つてくれる人も多い。そう言われるのも無理はない。しかし、卒直に言うならば、現在の経営方針が続く限り、打開は甚だ困難であると言わざるを得ない。戦後のベビーブームの波は、いま大学の門を激しく打っているが、中・高への波は既に収まり、生徒の数は全国的に減少の一途を辿っていることは衆知の事実である。そしてここ数年ならずして大学に押しよせる波も静まり、近年雨後の筈のようにできた大学はもちろんのこと、長い歴史を持ついわゆる名門校でさえ、果して従来のように多数の志願者を引きつけることができるかどうかは、大きい疑問と言わざるを得ない。今や中学・高校と言ひ、大学と言ひ、私学である限り経営上の危機はいよいよ深刻になりつつある。これを切り抜けて経営上の安定を確立することとは、私学にとつて正に死活の問題であり、各学校が血眼になつていふことは無理もない。そのためにはよい教職員の組織と共に、よい設備が要求せられることは当然である。

まず欲しいのは広いキャンパス、エリアを十分にとり、設備のよく整つた静かな明るい校舎、図書館、学生会館、体育施設、寮舎など数えあげれば限りが無い。そして、同志社の女子教育機関においても、この例に漏れないのである。現在の女子中・高並びに女子大学は、わずか一一、五〇〇坪足らずのキャンパスに約二、四〇〇名

余の女子大生、一、六〇〇名余の女子中・高生が共存し、その上に四〇〇名に於ける女子大生の寮舎の設備がある。現在のような状況の下で、各学校があらゆる面で充実と発展を要請されている以上、互に利害が相反するような幾多の問題に当面することは当然のことであり、責任の衝にあたって、できるだけ円満に問題の処理に苦心しなければならぬ学長や校長の立場は誠に氣の毒である。なるべく他の学校に迷惑を及ぼさず、不愉快な摩擦を避けるためには、あらたに隣接の土地を買わねばならぬ。猫の額ほどの土地に何百万、何千万という大金を支払われねばならぬ。誠にもつたいない話である。こんな狭い土地に雑居しているより、いっそ近頃買収した田辺校地に引越してはどうか。そこには十四万二千坪という広大な土地が待っているではないか。女子大学が移ればよい、いやむしろ女子中高の方がよからうなどさまざまの意見がある。こうした意見は女子部のキャンパスからよりもむしろ、共学のキャンパスから聞こえて来る場合が多い。確かに田辺校地はよいところである。同志社があの土地を買収したのは、賢明な策であったと思う。今後あの土地に一大綜合学園とそれに連なる学園都市の建設が、真剣に要望される日は必ず来るであろう。その実現は一日でも早い方がよい。

田辺校地の買収に当っては、学園都市の構想がしばしば唱えられた。しかし、それに対する推進力は、その後必ずしも強力であるとは思えない。この校地買収の動機となり、大学校舎の建設の必要を訴えて、熱心にその実現を要望していた大学当局も、その後の学内事情で従来の計画を引込めざるを得なくなっている始末である。いろいろむづかしい事情のあることは察せられる。しかし現在一七、

〇〇〇余名(昭和四一年度)の学生数を擁し、更に学生数においても設備の点においても将来一段の充実と発展を目指している同志社大学の行くべき道は、田辺校地への全面的移転ではないかと思う。そしてこのことが実現されてこそ、かの地に一大綜合学園なり、学園都市の建設なりが可能となるのである。

同志社女子教育の問題点を考える場合には教育内容や制度上の問題や、その他さまざまの事柄が論ぜられるが、私は女子部将来の発展を考へるとき、敷地問題が今後一層重要性を増して来ると思う。そしてその解決のキメ手は将来同志社が田辺校地をいかに利用するかにつながっていると思う。この問題が解決されたなら、それと共に他の重要な事柄も水の流れるように解決することとなる。その場合、女子の各学校が学園都市の一環として、挙げてかの地に移転するか、または数年前山口理事が将来の同志社に対する一大構想の中で提唱されたように、今出川校地を女子部のキャンパスとするかなどは、大学の移転問題と関連して十分に検討の上決めるべき事柄である。ここで論ずることは時期尚早であろう。

学園都市建設の問題は、確かに同志社有史以来の大事業である。これを達成するためには区々たるセクシヨナリズムや目先の利害得失に捉われることなく、大きい将来の見通しをもつて、強力に前進しようとする空氣が学園の中に澎湃として起つて来るのでなかったならば、その達成は覚悟かない。現在かの地には女子大学の体育施設その他が造られつつある。それも結構であるが、それと同時に一日も早く根本的な構想が樹立せられ、全学園がそれを実現するために努力する日の近いことを希望して止まない。

(前女子大学教授)